



フレッシュアーティスト賞／ヴァイオリニスト
金川 真弓氏

(プロフィール) **金川真弓** (かながわ・まゆみ) 1994年ドイツ・フランクフルト生まれ。4歳から日本でヴァイオリンを始め、その後ニューヨークを経て、12歳でロサンゼルスに移る。2018年ロン＝ティボー国際音楽コンクール第2位入賞および最優秀協奏曲賞、2019年チャイコフスキー国際コンクール第4位を受賞し、一躍注目を集める。現在はベルリンを拠点に演奏活動を展開。ハンス・アイスラー音楽大学でコリヤ・ブラッハーに、また名倉淑子、川崎雅夫、ロバート・リップセットの各氏に師事。これまでにブラハ放送交響楽団、マリンスキー劇場管弦楽団、ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団、NHK交響楽団、読売日本交響楽団、東京都交響楽団など国内外の多くの交響楽団と共演を果たしている。室内楽やアウトリーチでは、トランス＝シベリア芸術祭やヴェルビエ音楽祭等に出演するほか、トナリ・ツアーズのドイツ・ツアーに出演した。使用楽器は、日本音楽財団貸与のストラディヴァリウス「ウィルヘルミ」(1725年製)。

目と耳をしっかりと開き、
感度を高くして新しい挑戦をしたい。



1999年、名倉先生と最初のころのレッスン



2004年、石川アカデミーにて恩師の川崎先生と
2011年、アスペン音楽祭でリップセット先生と



ベルリン・ハンス・アイスラー音楽大学でクアルテットのリハーサル



ブラッハー先生とのレッスン



2018年、ロン＝ティボー国際音楽コンクール授賞式でヴェンゲーロフ氏と握手を交わす



ブラッハー先生のクラスでの集まり



2018年、ブラッハー先生のクラスRBBKulturの収録にて



2023年、チェコのビルゼン・フィルハーモニックとバツェヴィチのコンチェルト



特別賞／音楽プロデューサー
平井 満氏

(プロフィール) **平井満** (ひらい・みつる) 1949年神奈川県出身。1990年鶴沼室内楽愛好会の結成に参加。教員を続けながら、2009年より代表として「鶴沼サロンコンサート」の企画・運営に当たり、2010年には会として神奈川県地域社会事業賞を受賞した。2022年4月には第400回を迎え、現在では日本を代表するサロンコンサートとして、全国紙やNHKでも紹介されている。その経験を活かし、2008年には横浜楽友会を設立し、2010年より代表。また、2011年には海老名楽友協会の設立にも参加するなど、神奈川県内の公共ホールでのコンサートの企画・運営にも当たっており、年間30公演を超えるコンサートの開催に携わっている。著書に「クラシックコンサートをつくる。つづける。～地域主催者はかく語りき」(渡辺和氏との共著、水曜社)。2019年第6回「JASRAC音楽文化賞」受賞。横浜楽友会代表、鶴沼室内楽愛好会代表、海老名楽友協会代表代行、音楽プロデューサー協会幹事。

続けることが大事。
自分が聴きたいコンサートもこれから。



2011年6月14日の
鶴沼サロンコンサート
300回記念コンサート



ブラジャーク・クアルテットの
ペートーヴェン・プロジェクト



2014年12月14日の
ひまわりの郷にて。
フォーレ・クアルテット



サルビアホール
3階音楽ホール



鶴沼サロンコンサートの
会場「レスブリ・フアンセ」 平井氏が司会をしている様子



鶴沼サロンコンサートで
会場「レスブリ・フアンセ」 平井氏が司会をしている様子

楽器というより自分の声に近い感覚

このたびは受賞おめでとうございます。金川さんと音楽の出会いからお聞かせください。

金川 プロではありませんが、両親ともクラシックが好きで楽器を弾いていました。父は3人兄弟ですが、父だけヴァイオリンを習わせてもらって、他の2人の叔父はお金がかかるから空手だったそうです(笑)。私は3歳で母にピアノを習い、4歳からヴァイオリンを習いました。

ヴァイオリンを始めたきっかけは何ですか。

金川 両親の勧めです。ヴァイオリンはピアノと違って初心者として音を出すのが難しいのですが、最初から良い先生に恵まれたこともあって続けることができました。ヴァイオリンという楽器は自分の体に沿わせるようにして弾きます。声帯に近い場所に密着させるので、長年やっているとなると楽器というより自分の声に近い感覚になります。弓も自分の腕が伸びたような感じですね。

日本、ドイツ、アメリカと多文化のなかで育ったことは、ご自身にどんな影響がありましたか。

金川 私はアメリカで育ちましたが、両親の方針で家では日本語を話していましたし、日本の価値観を家では教わりました。ただ、現地の学校に通っていたので、そこはアメリカ。日本だと周りに合わせるものが求められますが、アメリカでは「あなたはスペシャルな存在だからちゃんと自己主張しなさい」と言われる。家と学校で教育方針が違うわけです(笑)。音楽は自分のエモーションを膨らませる芸術なので、そうした対照的な文化のなかで育ったことは、やはり自分の音楽性に影響を与えていると思います。

尊敬している作曲家を教えてください。

金川 たくさんいるのでなかなか1人を挙げるのは難しいのですが、子どものころから好きなのはブラームスです。ドイツとオーストリアで活躍した作曲家です。それとバルトークも好きですね。ハンガリーで生まれた作曲家で、東欧の民族音楽の要素を取り入れた作品を書きました。2人に共通しているのは、リズムや旋律など音楽の構造を緻密に計算しながら、同時に感情的な要素も上手に組み込んで作曲しているところ。そこはすごく惹かれますね。

小さなコンサートが著名演奏家を呼べる理由

平井さんが代表を務める鶴沼室内楽愛好会の「鶴沼サロンコンサート」は、今や日本を代表するサロンコンサートとなっています。著名な演奏家も多数出演しています。

平井 おかげさまで30年以上続けることができました。海外のアーティストにもたくさん出てもらいました。ソプラノ歌手のエディット・マティス、ピアノのハリナ・チェルニーーステファンスカ、チェロのピーター・ウイスベルウエイ…挙げ出したらきりがありません。

地方で、しかも会場は小さなレストランであるにもかかわらず、そうした演奏家を呼べるのはなぜでしょうか。

平井 我々は隙間産業なんです。昔は日本の音楽事務所が海外の演奏家を招聘する場合、1〜2回の公演では採算が合わないの、だいたい5公演分のギャランティを払って来てもらっていました。ただだいたい4公演くらいしか組めなくて、すると1公演余る。だったら「鶴沼でどうですか」と声をかけるわけです。「ギャラはあまり払えませんが」と言っても(笑)。しかもレストランの定休日に合わせてこちらのコンサートは火曜日。通常のホールでのコンサートは週末なのでスケジュールも空いているし、だったら「いいよ」と言っていただけなんです。

現在は日本人の著名な演奏家のコンサートも多いですね。

平井 はい、最近は海外の演奏家は少なくなっている、日本人が中心になっています。これは、コンサートが400回を超えて日

第34回 日本製鉄音楽賞 受賞記念コンサート 7月11日に紀尾井ホールで開催

7月11日、紀尾井ホール（東京・千代田区）で第34回日本製鉄音楽賞の受賞記念コンサートが開催され、将来を期待される優れた演奏家に贈られる「フレッシュアーティスト賞」と、音楽文化の発展に大きな貢献を果たした個人に贈られる「特別賞」を受賞した2人が舞台上に立ちました。

「日本製鉄音楽賞」は、日本の音楽文化の発展と、将来を期待される音楽家のさらなる活躍の支援を目的として日本製鉄が創設したものであり、1990年の創設以降、毎年、受賞者への贈呈式と受賞記念コンサートを開催しています。なお、贈呈式は、これに先立つ3月18日に行われています。



第1部では、平井氏による受賞記念トークが行われました。受賞発表以降、お祝いの言葉や祝電、花束を数えきれないほどいただいたと反響の大きさを語る平井氏。今まで企画してきたコンサートでは純粋に「自分が聴きたいと思う曲・音楽家」を選んで楽しそうに語る言葉の端々にクラシックへの愛情が感じられました。最後には「続けなければ定着しない」と、今後もクラシックのために粉骨砕身するとの強い想いを語りました。



第2部では、金川氏による演奏が行われました。前半はバッハを取り上げ、最高峰の1つといわれる名曲を超絶技巧と確かな技術力で弾き、繊細で澄んだ音、軽快で躍動感のある音、激しく重々しい音、重厚で豊潤な音を、時には複数の音を重ねながら、曲の持つさまざまな感情を圧倒的な表現力で奏でました。バッハ、またプーランクはファシズムのもとで世界大戦の間に書いた曲、今の世界の状況を重ね選曲しました。これからも演奏をとおして、機械と計算が蔓延している社会のなかで芸術のヒューマニズムを伝えていきたい、と語りました。

新旧フレッシュアーティスト賞 受賞者による「響演」

今回の受賞記念コンサートでは、金川氏と交流が深く、第13回(2002年度)フレッシュアーティスト賞受賞者であるピアニストの小菅優氏が友情出演されました。「今日ここで小菅さんとエンジョイできて嬉しい!」と満面の笑みで語った金川氏。小菅氏と共に奏でる音色は多彩な表情を持ち、お二人の力強く豊かな感情表現で紡がれる圧巻の演奏に観客は酔いしれ、演奏後は割れんばかりの拍手がホール中に鳴り響きました。



本演奏の様子は日本製鉄ホームページでオンライン配信しています。
<https://www.nipponsteel.com/csr/social/music/prize.html>



本の演奏家の皆さんに「あそこは自分たちが好きなように演奏できる場だ」と認識されるようになってきたからです。こちらは何をやってももらってもかまわないという方針なので、ほかのホールではできないこだわりのプログラムを組める。そこが支持されていると思います。

—— 鶴沼だけでなく、横浜市や海老名市などの公共ホールでもコンサートをプロデュースされています。

平井 私は教員を40年やって、定年になって再雇用も考えたのですが、給料が減るのに同じ仕事をするのはいやだなと(笑)。じゃあ好きなことをやろうと思って、まずは自分の地元である横浜市港南区の「ひまわりの郷」というホールでコンサートシリーズを始めました。それがうまくいったので、今度は海老名でやってほしいと声がかかり、次は横浜市鶴見区のサルビアホールと、どんどん活動が広がっていきました。

コンクールは自分にとって学びの場

—— これまでチャイコフスキー国際コンクールやロンドンティボ国際音楽コンクールなど多くのコンクールで入賞されていますが、金川さんにとってコンクールとはどんな存在でしょうか。

金川 チャイコフスキーとロンドンティボールだけでなくさまざまなコンクールに出場しています。演奏に順位をつけることに対しては複雑な思いもあるのですが、世界中から同じパッションを持った演奏家が集まってチャレンジするという意味では、とても楽しいし学ぶことが多い場だと思います。とくにチャイコフスキー国際コンクールはモスクワ音楽院で開催されるのですが、ここは非常に歴

史ある学校で、著名な音楽家を数多く輩出しています。彼らが歩いたのと同じ廊下を歩いたり、レッスンした部屋を使わせてもらったり、貴重な体験をすることができました。

—— 世界各地で演奏されていますが、聴衆の雰囲気は国によって違いますか。

金川 違いますね。とくに日本は静か(笑)。皆さんとても集中して聴いてくれます。慣れてないと最初は緊張しますが、こちらでも集中できるのでありがたくもあります。あとはホールの音響も日本はとても良いですね。ドイツだと、ホールだけじゃなくてバーや工場を改装したクラブなどで演奏することもあります。そこはふだんクラシックを聴かないお客さんでもいて、いろんな人がまざっていて面白い。そういう雰囲気も好きですね。

—— 最後にこれからの抱負をお聞かせください。

金川 はっきりとした1つの目標を掲げるというより、常に目と耳をしっかりと開いて感度を高めていろんなことにチャレンジしていきたいと思っています。あとは、今、世界的に女性やマイノリティの作曲家にも光が当たるようになってきています。それはすごく良いことだと思いますし、才能はあるけれど埋もれた作曲家の作品を聴衆の皆さんに届けていきたいと思っています。

儲からなくていい。でも赤字は出さない

—— 平井さんはまさに手づくりでコンサートをプロデュースされてきたわけですが、活動をしていく上で大事にしていることは何ですか。

平井 長くやっているといういろいろあります。震災

もコロナもありました。それはどうしようもないんです。ただ、そうした出来事に遭遇しても続けていくことが大事で、そのために赤字を出してはだめなんです。そもそも儲かりはしませんが、なんとか赤字を出さずに運営してお金を少しでも貯めておく。実際、そのおかげでコロナも乗り切れました。続けることがいちばん大事です。

—— 続けるためにどんな工夫をされているのでしょうか。

平井 日本は全国に良いホールがたくさんあります。東京や大阪に比べると頻繁にクラシックのコンサートをやっているように思うかもしれませんが、地方ではぜんぜんやっていない。なぜなら赤字になるからです。するとますますやらなくなるわけです。でも、実はクラシックは習慣性が重要で、定期的に聴くようになるとちゃんと足を運ぶようになる。その習慣性をどうつけるかがポイントなんです。だから年に1〜2回開催するだけではなく、私の場合は最低でも年に4回は足を運んでもらえるようにセット券で販売することが多いです。海老名市のホールは、中規模のホールとして日本でも最高峰のホールですが、クラシックは全然やっていなかった。それでも3年4年と続けていくうちに定着していくんです。

—— 最後にこれからの抱負をお聞かせください。

平井 やっぱ引き続きのことですね。私は基本的に自分が聴きたいコンサートを手がけてきましたし、実際に自分で聴きます。これからも自分が聴きたいコンサートのプロデュースを続けていきたいですね。

(このインタビューは、3月18日に行われました)